ONE NAGAO
PROJECT JOURNAL

長尾福祉会はなぜ生まれてきたのか？ 当時の想いは？
立ち上げ時期だからこそ、苦労したこと、楽しかったこと、
今だから話せること。そして、長尾福祉会のこれからを
担う皆さんに伝えたいこととは。
設立当時をよく知るメンバーによる座談会の模様を
たっぷりとレポートします！

vol. 2
2018 OCTOBER

トップ座談会 REPORT

9月18日、長尾けやきの里。荒川理事長、田部井副理事長、勝田事務局長、
山本保育事業部長、長嶋障害福祉事業部長にお集まりいただき、座談会が開催されました。
法人設立のときのこと、保育事業スタートのときのこと。長尾福祉会らしさや強み。
これからに期待したいこと。皆さんへのメッセージ。20年を迎えるいま語られた、
5人の言葉をお届けします。

みんな前向きで、一生懸命だった。20年前、長尾福祉会のはじまり。

荒川理事長（以下 荒）　このあたりには病院や介護施設もあるし、ちょっと行ったところには西部地域療育センターもできていたし、溝の口に行けば養護学校もある。設立時には、この地域、平瀬川の周辺を福祉ゾーンにしたいという構想があったんです。1998・99年当時、私はまだ現役で養護学校に勤めていて、校長をやっていたときに、この法人を立ち上げた井田正敏さんという人が教員でおりまして「こういうのをつくりたいんだけど」と相談を受けていたんです。実は、法人ができるときのことは、私よりも長嶋さんや勝田さんのほうが詳しいんです。

長嶋障害福祉事業部長（以下 長）　ここはいま神木本町って言いますけど、以前は長尾という地名だったんですね。初代の理事長（井田正敏氏）のお話では、法人や施設の名前を決めるときに、長尾の名前を残したいと。あと、ケヤキの木がそばにあって、ケヤキの木のように地域に根を張っていきたいという想いがあって。井田さんも、「長尾けやきの里」初代施設長の富居さん（富居きよみ氏）も、もともと、養護学校で卒業する方たちの行く先をお手伝いする進路担当だったんですよ。進路担当の人たちがいちばん困るのは、障害の重い人たちで、行き先が厳しい人たちがいるわけですよね。当時、約80名の方が利用を希望して応募してきました。じゃあ、障害の重い人であったり、大変な人であったりを支援するのが「長尾けやきの里」じゃないか、ということでスタートしたんですね。

勝田事務局長（以下 勝）　富居施設長の言葉がとても印象的で、常に言われたことは「利用者本位の支援を心がける」ということ。私が入職した当初、利用者の方を「○○くん」のように“くん”づけで呼んでいたところ、トントンと肩を叩かれて、これからは“さん”づけにしてくださいと言われて。人権意識をとても高く持ってくださいということで。それと「地域の方たちにひらかれた施設をつくっていきたい」ということを、富居施設長は、いつも熱く言われていたということを覚えています。

長　地域の人たちのなかで、なんとかここが根付くように、理事長以下職員はがんばったんですよね。ボランティアさんも多かったよね。口コミで集まってくれてね。いまでも、働いていても2ヶ月に1度の土曜日だけは必ず来てくれるとか、お祭りのときだけは絶対に来てくれる人もいて。それは、ボランティアさんが、ずっと「長尾けやきの里」を愛してくれているから。あとは、元職員がご夫婦でボランティアに来てくれたりとか。退職しても、利用者の方たちのことが大好きで来てくれるんですよ。

勝　立ち上げ当初は、利用者の方が50名いらっしゃって、慣れない環境でしたので、非常に不安定な状態の利用者の方が多かったんです。食堂のなかに、職員も入れて、だいたい80～90名くらいが入って、いっせいにみんなで食事をとるんですけど、まぁ、大変でした。ご飯とかが飛んでいたり、突然、テーブルが倒れ、食器が割れ（笑）、そのなかで、平然とご飯を食べている人がいたり、その横で慌てて食器を片付けている人がいたりで。

長　利用者の方は、ほとんどが18歳だったんです。若くて、エネルギーがあって。だからもう、散歩も1時間以上ずーっと歩いていくとか、3階から傘を落として隣の車に穴開けて50万円弁償とか。ダーっと走って、自動扉を出て行っちゃいそうになったりとか、窓を開けて飛び降りようとした人を止めたりとか、当時はそんな感じ。

勝　自分は、送迎車の運転をしているときに、利用者の方から目隠しをされて、交差点の真ん中で停まっていたりとか。いま考えると、非常にハードで恐ろしいことを体験しましたね。それも、半年くらいで落ち着いてはきたんですが、そのようなオープニングで、職員も生傷が絶えなくて。そういうことが多々あったんですが、いまになって思うと、楽しかった思い出だなぁと思っております。

長　すごかった。ただ、みんな元気で楽しそうだったよね。

勝　うん、楽しそうでしたね。いやで来なくなった人はいなかったですね。オープニングスタッフのメンバーを考えてみると、長嶋さんもギターの名手なんですが、音楽の得意な方が中心になっていましたね。富居施設長の言葉を借りるなら「文化を発信できるような施設をつくりたい」ということで、初年度からロビーコンサートを開催したりしていました。いまも残っているさをり織りや陶芸の活動がありますが、それぞれにプロ級の職員がいたりと、そういった芸術的な文化が大切にされている、アート性の豊かな施設だったなと思い出しています。

長　職員は20名をきるくらい。いま思えば、よくやったなという人数だよね。当時の職員って、ものすごくいろんなことをやってみたいという感じがあって。みんな前向きで、一生懸命やっ

て。いまだったら問題になるかもしれないけど、みんなけっこう遅くまで残ってたよね、ああだこうだ、言いながら。そういえば、初年度で、職員同士で結婚したカップルがいたよね。お祝いの会を食堂でやってね。勝田さんがお話ししたように、音楽の得意な職員がいて、バイオリンとホルンとチューバとかそろってて、お祝いの演奏をしてね、本当にうまかったよね。

勝　若い職員が多くて、非常に熱意ある方たちで、いまある基礎をつくっているのは、その当時の若い職員たちの力が大きかったんだろうなと思っています。その熱意をしっかり受け入れられていた、富居施設長の度量というか、手腕というかを強く感じているところです。

2007年「どりーむ保育園」開園。学びあって、悩みを打ちあけあって、一年一年、ここまで重ねてきた。

山本保育事業部長（以下 山）　私は、公立保育園で長く仕事をしておりまして、40 年現場にいたんですけれども、そのあと、川崎市の当時88ヶ所の公立保育園を統括する部署に異動になりました。定年 60 歳の 1 年前、59 歳で退職を申し出たところ、部長から「長尾福祉会さんで、はじめての保育園立ち上げなので手伝ってみないか」という声をかけていただいたんです。溝の口駅と新川崎駅周辺の再開発事業のなかで、JR の操車場跡地にたくさんのマンション群が建つということで、ファミリー層が増えるにあたり、保育園が必要になってくるだろうということで、行政で保育園をつくる事業者を公募していたんですね。

勝　保育事業を立ち上げるきっかけになったのは、当時、主幹で岡さん（岡幸男氏）という人がおりまして、非常にチャレンジャーだったんですね。すべての川崎市の新規事業に対して応募するくらいの方で。そのDNA は、けっこうこの法人のなかに残っていると思うんですが。それまでに、応募に 5 回くらい外れて、ようやく当たった！という印象でしたね。保育の“ほの字”も知らないのに、応募だけしちゃって「あ、当たっちゃった…」というようなことは言っていた記憶があります（笑）。

長　本当に、われわれはまったくわからなくて。保育園のことについては、山本先生に来ていただいて、仕切っていただいて。

山　いえいえ、とんでもないです。自分としては、悠々自適といいますか、晴耕雨読といいますか、そんな生活を夢見ていましたから、いっぺんには受け入れられずに、足踏みをしている状況でした。長尾福祉会については、当時よく知らなかったのですが、創設者の井田さんにお会いしまして、引っ張られたという感じですね。夫にも反対されたのですが、保育に対しての未練ですかねぇ。成長する子どものいる現場というのは、自分自身の成長にもつながるといいますか、そんなところに魅力を感じましたね。やるからには「自分自身の心に NO と言わない。さまざまな困難にも NO と言わない。最善を尽くして結果を出す園長になろう」という、そんな意気込みを持っておりましたね。

長　障害と保育の合築だったんですよ。「サポートさいわい（どりーむ保育園）」は、1・2 階が保育で、3 階が障害なんです。それは当時、本当に珍しくて。うちがはじめてだったかな。そういうことをやろうと思うところがなかったんだと思うんですよ。それから後に、もっと珍しい、支援校のなかにパン屋さん（「あんてろーぷ たじま店」）というのもできますけど。

山　初年度は、職員は 17 名でした。うち 9 名が新規採用の職員、8 名が経験者で、「ベテラン」から「若者」が学べる保育の環境は忙しさに流され厳しい毎日でした。職員たちには「学びの心を持ち続けながらも、肩肘張らずにやろうよ、その日が“まる”であればいいんじゃないか」と、そんなことを声かけながらの運営でしたが、子どもの泣きに、一緒に泣きたくなるような新卒職員の保育現場も多々ありました。よくぞ一日一日を無事にまわしてくれたな、というのが初年度の感想です。その後、川崎市保育会に加盟させていただき、園長仲間からは、私立保育園の予算執行等の運営を学び、職員たちは研修や交流会を通しての学びや悩みを相談する機会をいただき、運営に力強さがプラスされて今日にいたります。去年、加盟する川崎市保育会から（初年度に採用した）9 名が 10 年勤続の表彰をいただきました。こぞっての永年表彰は会としても前例がなく、高評価をいただきました。

“地域”ってなんだろう？もう一回、地域についての概念を共有し、再構築しないといけない。

荒　利用者の方に、保育園の子どもたちに、寄り添って支援をするという部分は、当初から本当に変わっていません。その結果、障害の施設は定員いっぱいですし、保育園も毎年希望者殺到なんです。「長尾、いいところみたいねぇ」というお母さんもけっこういますし。利用者の方が、公園の清掃をするとか、廃品回収やダンボール回収をするとか、そういうことが自然に、地域での評価を高めているんじゃないかなと。2013 年には、川崎区にある「キング スカイフロント」（殿町国際戦略拠点）内に「フォルテ」ができて、田部井さんが担当しているんですけれども、そこも川崎市南部の方にたくさん利用いただいているようで。

田部井副理事長（以下 田）　「フォルテ」というのは、とてもユニークな場所なんです。川崎市が「キング スカイフロント」という健康・医療・福祉の最先端の研究拠点をつくっているんですけれども、言ってみれば、そこはエリートの集まりなんです。そのなかで、障害のある人たちが

仕事をして、エリートの人たちと接点をもっていく、理解しあっていく、ということの価値はあるかなと。

荒　そんなふうに、地域を広げていくということが大事なんですね。隣には「フレンド神木」（社会福祉法人三神会）という特別養護老人ホームがありまして、そういうところとの連携もできるようにしていきたい。いま、全国的に見ても、お年寄りと園児や障害者との接触が非常にいいということが言われています。私どもも、そういうことをできるだけ、無理はしないで進めたいなと思っています。

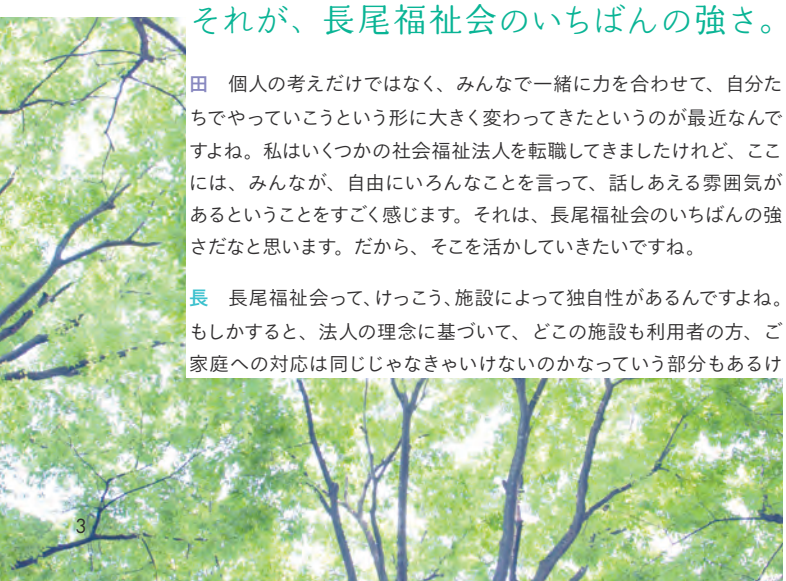
田　地域社会との共生については、私なりの想いがあってですね。言ってみれば、障害があろうとなかろうと、ありのままをお互いが認めあえる社会というのが、われわれの大きな目標だと思っています。障害者を支援している立場としては、障害者と一緒になって、地域を変えていくくらいのつもりで、仕事をしていくべきだと私は思っています。障害のある人たちが社会に出て行って、一緒になって社会をつくっていく。でも、彼らだけではできないので、われわれもそれをお手伝いする。障害のある人たちが、単に権利を主張するのではなくて、彼らが社会貢献する。そういう役割を目指しているんです。その考えを押し付けるわけではないですが、そういうことについて、これから皆さんと話しあっていきたいと思います。

勝　地域という概念が、実は、長尾福祉会の職員のなかで固まっていないのは事実だなといつも思っていて。1999 年に、ここの法人ができあがった当時は、施設解体論というのが盛んに言われていて、障害者＝入所施設で一生暮らす、みたいなところを解体しなければいけないという論調が非常に強いときで、地域という言葉を頻繁に使っていたんです。オープニングスタッフの職員たちとは「この“地域”ってなんだろうね？」っていう話を常にしています。いろいろな職員の話も聞くと、みんながそれぞれに地域のあり方を思っているな、というのを感じています。なので、もう一回、地域についての概念を共有し、再構築しないといけない時期にきているなと感じています。

長　いまちょうど 20 年で、とにかく、長尾福祉会はこれからかなっていう気がしますよね。本当に、利用者の方のためにと思ってやってきたことは間違いじゃなかったし、地域への想いも間違いじゃなかったんだけど、これからが新しい時代になっていくのかな。

荒　助走段階なんだよね。なにしろ、できた当初から 10 年くらい「職員が一生懸命やってるから、この施設が成り立ってるんだ」って。その時期が 10 年。その間に、いろんなところに、生活介護や就労の施設ができて、保育園もできて。発展させていったけど、理事を勤めながらその様子を見ていると、なかがアップアップの状態でした。その 10 年というのが、1 つの転換期だろうなと思い出しています。

みんなが、自由にいろんなことを言って、話しあえる。それが、長尾福祉会のいちばんの強さ。



田　個人の考えだけではなく、みんなで一緒に力を合わせて、自分たちでやっていこうという形に大きく変わってきたというのが最近なんですよね。私はいくつかの社会福祉法人を転職してきましたけれど、ここには、みんなが、自由にいろんなことを言って、話しあえる雰囲気があるということをすごく感じます。それは、長尾福祉会のいちばんの強さだなと思います。だから、そこを活かしていきたいですね。

長　長尾福祉会って、けっこう、施設によって独自性があるんですよね。もしかすると、法人の理念に基づいて、どこの施設も利用者の方、ご家庭への対応は同じじゃなきゃいけないのかなっていう部分もあるけど、長尾福祉会はそうではなくて、それぞれに地域の特性のなかで上手に合わせながらやってるというイメージがあるかなぁ。特に、北と南は距離も離れているし、地域の文化が違う感じはちょっとあるのかなと思うけど。

荒　（地域の）文化は違うねぇ。

勝　うちの法人に転職してきた方からよく、「長尾福祉会は、無色透明のイメージがある」というふうに言われます。なにか偏った宗教色があるわけでもないし、政党色もない。何色にでも染まるというイメージなのかな、その無色透明という言葉が、うちの法人にぴったりだと思います。あと、無色透明でありながら、とても明るい雰囲気がある。そして何より、自分が 20 年前にここにお世話になったときから「利用者本位」「自己選択・自己決定」を大切にした支援をしなさいということを、常に強く言われていて、それが、うちの法人のすべてだと思います。文化が違うという言葉はありましたが、すべての施設が、利用者の方の視点に立った支援をしています。

田　いま、福祉の世界では「自己決定・意思決定支援」ということがすごく重視されています。自己決定という言葉がでてきたのは、もう 20 年くらい前になりますけど、これだけずっと取り組めているというのは、すごく大事なことで、評価できるところですね。

山　私ども、保育部門から法人を見ると、福祉の心に溢れている皆さま方で、「誠実」「一生懸命」という二言で表現できるかな、と思っております。苦手意識のあるホームページや、保育園のパンフレットをつくる作業に、原さんや柳澤さんが忙しいなかで手を差し伸べて努力してくださるって、他の法人にはないなぁって思って。本当に、このことが法人を代表しているような気がいたします。

長　正直、僕とか、理事長とか、副理事長とかね、そんなに先は長くないわけで、いまいる職員、新しい職員たちが、これからの長尾福祉会をつくっていく原動力になると思うんですよ。で、一つ、その人たちに望むのは、昔の話をしちゃうとあんまりよくないんだけど、いまの職員はみんな、すごくいい仕事はするんだけど、もう一つ、初期にあったフロンティアスピリットみたいなものが、そこに加わるといいかなって。そのためには、僕は、対応力かなって思ってるんです。いろんな困難なことが起きるじゃないですか。それにどう対処していくかっていう、その対応力があれば、新しいことにもチャレンジして、乗り越えていけると思うんですよ。

勝　やっぱり、若い方たちが皆さん賢くなったな、と思います。非常にむだのない動き、洗練された華麗なドリブラーみたいな感じで（笑）、ゴールまで走って行くんですが、なんかもうちょっと「バカ者」でもいいかな、みたいな。長嶋さんの言ったフロンティアスピリットのように、がむしゃらさみたいなものもほしいかなって。おいおい、って止めてみたいっていうのもあります。

長尾福祉会はこれからどうなる？ 先の夢をもってやっていかないと。

荒　いま、皆さんが言われたことが、そういうかたちで進行していることが、とてもうれしく思っています。利用者の方を大事にしていくということと、同時に、職員も一緒に楽しむということ。それができると、みんなで、仲よくできるし、明るくできる。お金じゃない、利用者の方と一緒にいることが楽しくなってくると、こういう仕事がもっと進められるんじゃないかっていうのが、私の基本的な考え方です。

田　最近の若い者は、という年寄りの言葉になってしまいそうですが（笑）、ちょっと割り切りすぎているところはないだろうかと。理事長もおっしゃったように、利用者の方と一緒に自分の仕事を楽しむという視点は、この仕事でとても大事かなと思います。私も自分の仕事を楽しんできましたので。同時に、広い視野をもってほしい。何のために自分たちはやっているのか？ 利用者の方が自立するためですけれども、自立するためには、社会を変えていかなければいけない、利用者の方だけでなく家族も支援していく必要がある。目の前の彼らが楽しく生活するということが第一義的なことであることは間違いないですが、それだけでなく、関連することも含めて、いろんなことを勉強して、考えてほしいなと思います。

山　国の方策もあり、働きながらの子育て家庭が増え、保育する場が急激に増加しました。それに伴い保育士の採用が非常に難しくなっている現状です。選ばれた人を採用した時代から「保育士資格をもっている人ならば、まず採用しましょうか」という現状のこれからが懸念されます。この状況下ですが、どりーむ姉妹園の保育が守られ、保育の質が末永く保たれ、近隣に愛される保育園であり続けることを願っています。そして若者には「人から愛される心」を持ち続け「この人になら教えてあげよう」と思われる素直さ、そして先輩方には「あなたの後ろ姿は、いつも後輩に見られていますよ」の向上心と自律心を。判断を誤らず前進していってほしいと思います。

勝　いま、保育園の園児と、障害者施設を利用されている方と、あわせると約 500 名います。私たちの法人の職員が約 200 名。あわせると、約 700 名になっています。その家族を含めると、3,000 名くらいへの影響力をもつ法人に…。大きくなったな、と思っています。もしあなたが、なにかの不祥事を起こした場合に、法人がとりつぶされることがある。そのときには、3,000 名に影響がある、そういう責任がもうあなたにはある、とうことはやっぱりお伝えしたいと思います。あと、生活と仕事とのバランス、自分と他人との距離のバランス、そういったバランス感をもって成長していただきたいですね。

長　新人職員には、そんなに臆病になんなくていいよ、あんまりまじめすぎてもいけないよって。まじめすぎると、失敗すると、自分を責めちゃうんですよね。で、自分を傷つけちゃうじゃないですか。失敗なんて誰でもするんだから、そこから、どうやってリカバリーしていくかが大事で、自分一人で思い悩まないで、いろんなところにポケットをつくっておきなさいよ、相談できる人をつくっておきなさいよって思ってますね。それで、ゆっくりゆっくり成長していけばいいじゃんって。その上の人たちには、さっきも言ったように、対応力を身につけてくださいね、ということ。困ったことがあったとしても、それを認めて、自分なりに成長して、対応力を身につけていく。でも、仕事は、自分一人で全部やることはないんだよね。僕は、原さんとか、勝田さんとか、柳澤さんとか、田部井さんとか、理事長とか、山本さんとか、みんなに助けられて、いま、僕がここにいると思ってる。僕一人でやれたことなんか、なんにもないんですよ。いろんな人に相談して、いろんな人とコミュニケーションとって、みんなでやってくんだよね。

勝　これは、4 年目から中堅どころの職員に向けてになるのかもしれないですが、事務局長という立場でよく「法人としてはどうなんですか？」と言われるのですが、そのたびに自分は「法人って誰？ 法人ってどこ？ 法人ってなに？」というふうに、問い返しています。やっぱり、あなた自身も法人の一部なんだという自覚をもって、一緒に前を向いて進んでいきたいと思っているところです。

荒　勝田事務局長ともよく話すんですが「長尾福祉会はどうなる、100 年後を展望しようよ」と。保育園もあわせて、ここがつぶれないように、先の夢をもってやっていかないといけないだろうと。私は、昭和 30 年代の終わりから障害児教育に携わっていて、いまからだと想像もつかないようなことですが、当時は、学校のなかにある特殊学級を無視する先生方も多くいたんです。たかだか 50 年くらい前ですけれども、大きく変わってきているんで、これからはますます、こういうような施設で働くことが大事になってくる。いま入ってくる若い職員を見ていると隔世の感があるし、彼らが一生懸命やってくれる、笑顔を忘れないということが、私はすごいうれしいし、ありがたく思っています。皆さんが言ったことなんですけれども、幅広いものの見方をもって、いろんな場面で、いろんなことを総合的に見られるような支援者になってほしい。相談する人をいっぱいつくってほしいし、教養も高めてほしい。まず、自分を高めていくということをお願いしたい、そんなことを考えております。

社会福祉法人 長尾福祉会 沿革

平成 11 年	社会福祉法人長尾福祉会設立
同年	「長尾けやきの里（障害者日中生活介護）」設立
平成 14 年	「グリーンヒルズ（共同生活介護）」設立
平成 15 年	「しらはた（障害者日中生活介護）」設立
平成 18 年	「生活支援センターながお（障害者相談支援事業所）」設立
平成 19 年	複合施設「サポートさいわい」設立 「セルプきたかせ（就労移行支援／就労継続支援 B／日中生活介護）」 「生活支援センターきたかせ（障害者相談支援事業所）」 「どりーむ保育園（川崎市認可保育所）」 「かんがるー（地域子育て支援センター）」 「障害児タイムケアセンター　宮前平・白幡台」
平成 21 年	「ファームランドながお（しらはた分場）」設立
平成 22 年	「あんてろーぷ小杉（セルプきたかせ分場）」設立
平成 23 年	「ファームランドながお（日中生活介護）」単独事業所として独立
平成 24 年	「パセオやがみ（日中生活介護）」設立 「どりーむ東小倉保育園（川崎市認可保育所）」設立
平成 25 年	「フォルテ（セルプきたかせ分場）」設立 「地域相談支援センターれもん（※旧支援センターながお）」設立 「地域相談支援センターりぼん（※旧支援センターきたかせ）」設立
平成 26 年	「あんてろーぷ田島（セルプきたかせ分場）」設立
平成 27 年	「あんてろーぷ（就労移行・就労継続支援 B」単独事業所として独立

本音を聞く！

どうして、この仕事を続けているのですか？

いつも一緒に働いている仲間の「この仕事をしている理由」って聞いたことないかも…？
今回は、大先輩である、荒川理事長、田部井副理事長、勝田事務局長、山本保育事業部長、長嶋障害福祉事業部長に、この仕事との出会い、続けている理由などを聞いてみました。

障害のある方と接することが、一生涯のつながりに

荒川 佳紀 理事長

2003年、理事・評議員に就任。
2013年より、理事長。

教員志望で教員になったんですが、そのときに校長先生から特殊学級の教員をやらないかと言われまして、それからずーっと、彼らと関わり続けています。川崎市内の施設に行くと、どこへ行っても一人や二人は、見たことのある教え子や校長として卒業証書を渡した子たちがいる状態だから、もう離れられない。こういうような、障害のある方と接することが、私の一生涯のつながりかな。

「自分の信念を貫きたい」その強い想いでここまできました

山本 とく 保育事業部長

2006年、入職。2011年エリア部長、
2014年より保育事業部長。

高校３年のときに父が亡くなり、進学を諦めようとしましたが、担任の先生が神奈川県の奨学金制度のある保育の専門学校を勧めてくださったことが、いまの仕事につながっています。私は山形の生まれなんですが、当時、女性を県外に出すなんてめったにないこと。家長である兄夫婦に猛反対されました。必ず長く勤めて自分の信念を全うするから、と説得しました。その強い気持ちでここまできたのかなと思います。

癒してくれるんじゃないか？そう思ったことがきっかけ

勝田 憲之 事務局長

1999年、長尾福祉会入職。
2014年より、事務局長。

学校を卒業して家電の営業をやっていたんですが、非常に疲れてしまって。そんなときに障害のある人を見て、この人たちは僕を癒してくれるんじゃないかと思って入ったんですが、実際はぜんぜん癒してはくれなくて（笑）。先ほどからお話に出ている創設者の井田さんと最初の施設長の富居さんが教員ということで、教員がやる社会福祉法人は透明性があるように見えた、というのがここを選んだポイントでした。

自然体で続けてきた障害者福祉の仕事

田部井 恒雄 副理事長

2003年、監事に就任。2015年より、副理事長。

最初はこういう仕事をするつもりはまったくなくて、もともとは電気のエンジニアだったんです。障害のある弟がいて、きょうだいの会（全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会）というのに出会って、そこに出入りしているうちに、福祉のことをいろいろ学んだり、いろいろな人とのつながりができて、そっちの仕事に魅せられてしまいまして。日本理化学工業やいくつかの社会福祉法人を経て長尾福祉会へ。障害者福祉の仕事をごく自然体でやってきています。

基礎をつくってくれたのは精神のリハビリテーション

長嶋 季伸 障害福祉事業部長

1999年、入職。2011年エリア部長、
2014年より障害福祉事業部長。

母親が身体障害者だったということが一つあります。川崎市に社会福祉職として入庁し、リハビリテーションを希望したら、身体ではなく、精神のリハビリテーションだったんです。でも、そこですごくいろんなことを教えてもらって、基礎ができたような気がしています。長尾福祉会には、僕の奥さんが養護学校の教員で井田さんと知り合いだったこともあり、その縁もあって入職しました。

WATCH!

あらためて
見る！

社会福祉法人 長尾福祉会の“まわり”

今回の座談会でも「地域」のことが１つのテーマとなりました。
ふだんから、さまざまなかたちで地域とつながっているけれど、
離れたエリアのことはわかりにくい…。
宮前区・幸区・川崎区の３つのエリアから、
事業所まわりの要チェックスポットをご紹介します。

1 宮前区エリア

面積 18.61 km²／世帯数 99,308 世帯／人口 231,212 人

東高根森林公園

散歩の定番の場所。幼稚園児から高齢の方までいろいろな方の散歩コースであり、利用者の方や職員も挨拶を交わしたりと交流の場にもなっています。

とんもり谷戸＆生田緑地

初山にあるとんもり谷戸では地域の方々の環境保全活動により、夏場の夜間には蛍を楽しむこともできます。頑張って歩けば、生田緑地までの散策も可能です。天気の良い日に是非遊びに行ってみてください！

他にもいろいろ！

- 小泉農場
- 神木山 等覚院
- 鷺沼ふれあい広場（カッパーク鷺沼）
- 電車とバスの博物館
- せど梨園
- ビゴの店
- 宮前平　湯けむりの庄
- 川崎北部市場　　etc.

2 幸区エリア

面積 10.05 km²／世帯数 79,502 世帯／人口 167,158 人

夢見ヶ崎動物公園

「どりーむ」の名前の由来になった公園。入場無料なのにペンギン、シマウマ、キツネザルなど本格的な動物を身近に見ることができます。子どもが体を動かせるちょっとしたアスレチックやシートを広げてお弁当も食べられる芝生広場などもあり、家族でゆったり遊べます。駅から公園までの道にもガードレールなどちょっとした仕掛けが！

ラゾーナ川崎プラザ

映画、買い物、食事がここで楽しめます。
広い館内は雨天時でも安心。

他にもいろいろ！

- さいわいふるさと公園 わんぱく広場
- ミューザ川崎
- 志楽の湯
- 新鶴見機関区（汽車公園）
- 古市場陸上競技場
- 味の中華村
- 日吉分館
- 二ヶ領用水　　etc.

3 川崎区エリア

面積 39.21 km²／世帯数 118,187 世帯／人口 231,547 人

川崎大師

古くから「厄除けのお大師さま」として知られる場所。名物「とんとこ飴」は、某職員の学生時代のバイト先でした。仲見世などお散歩スポットとしてもおすすめ。

東扇島東公園・かわさきマリエン

ひろーい空の下、BBQが楽しめます。敷地内には、展望フロアやレストラン、サイクリングコースや潮干狩りができる人工海浜も。

他にもいろいろ！

- ラチッタデッラ
- ラウンドワンスタジアム 川崎大師店
- コストコ川崎店
- 川崎競馬場　　etc.

※各区の情報は、平成30年9月時点のものです。

未来へ向けた

PROJECT SCHEDULE

START!

1 2018.09

PROJECT JOURNAL vol.1

プロジェクトキックオフ号

2 2018.09

TOP座談会

荒川理事長、田部井副理事長、勝田事務局長、山本保育事業部長、長嶋障害福祉事業部長による座談会を開催。法人設立、理念に込めた想い、目指したことなどを語っていただきます。

3 2018.10

PROJECT JOURNAL vol.2

TOP座談会レポート号

4 2018.10/11/12

次世代リーダーワークショップ

組織も世の中も変化していくなか、長尾福祉会はどうありたいのか？どんな未来をつくっていきたいのか？次世代のリーダーたちを中心に、組織の未来を考え、描き、言葉にするワークショップです。

5 2018.12

PROJECT JOURNAL vol.3

次世代リーダーワークショップレポート号

6 2018.12/2019.01

アクション発想ワークショップ

未来のありたい姿を実現するために、具体的にはどんなことをしたらいいだろう？事業や勤務地の枠を超えて、みんなで意見や考え、想いを話しあい、実際のアクションを導き出すワークショップです。

法人パンフレット制作

ワークショップの内容をもとに、法人全体のパンフレットを制作していきます。

7 2019.02

PROJECT JOURNAL vol.4

アクション発想ワークショップレポート号

アクションの実施

※ 現時点でのおおよそのスケジュールです。詳細日程等は、別途お知らせいたします。
※ ワークショップ等への参加メンバーも、別途お知らせいたします。

NEXT! vol.3

座談会メンバーから受けとった、設立時の想いやこれからへの期待。
それらを胸に、長尾福祉会はこれからどうなっていきたいのか？
次号では、次世代リーダーたちを中心に行う、組織の未来を考え、描き、言葉にするワークショップの模様をお届けします。